

# 養護教諭コース学生に対する解剖遺体見学実習の教育効果の検討 —死への捉え方の変化を指標として—

和田 節子 ・ 小沢 哲史<sup>1</sup>

## Changes in the Yogo Teacher's Perceptions regarding Death, before and after a Practicum Requiring Examination of Autopsied Bodies.

Setsuko Wada and Tetsushi Ozawa

### Summary

In recent times, it has become necessary for Yogo teachers to deal with problems of students regarding the meaning of life and death in relation to issues such as abortion and attempted suicide. Because of this general need, a practicum in examining autopsied bodies has become a part of the curriculum of Yogo teacher. Changes in the student's perceptions regarding death, before and after the practicum, has been examined using the changes of perceptions regarding Death Perspective Scale (Kaneko, 1994). Moreover, ways of dealing with the practicum have been examined using the Scale of Multiple Mood Conditions (Terasaki, Kishimoto, & Koga, 1992). Results indicate that there has been a reduction of the perception that death is "ruin" and "parting" and that this effect was Especially noticeable in students who have "concentrated" on the practicum.

Received Sept. 15, 2006

**Key words** : Yogo teacher, examination of autopsied bodies, death perspective scale,  
Multiple mood conditions scale, education result.

### I. はじめに

本研究の対象者は養護教諭を養成するコースの学生である。養護教諭は、通常保健室において職務に携わるわけであるが、その役割は増して来ていると言える（保健体育審議会答申「養護教諭の役割」, 1997）。日常的な心身の症状への処置に留まらず、中学生はもとより、小学校高学年児童においても妊娠中絶の問題、自傷行為・自殺など生死に密接に関わる内容も職務となってくる。すなわち、「生や死の意味」までを見据えつつ職務を行うことが求められていると言える。したがって、養護教諭コース学生に「生や死の意味」を考えさせる教育ができれば望ましいということになる。

一方、筆者らの所属する短期大学の養護教諭養成コースにおいては、大学病院の協力を得て、解剖後、安置してある複数の遺体を見学するという実習を行っている。この実習及びその前後の指導は、人体の解剖学的理解と共に、死の意味を考えさせることも教育上の目的としている。た

<sup>1</sup> 現所属：和洋女子大学人文学部

だし、これまで十分な客観的な尺度を用いて、その教育効果を検討してこなかったと言える。そこで、本研究は死の捉え方に関する質問紙を用いて学生たちがどのように変化したのかを捉える。

養護教諭コースの学生であっても、現代社会に生きる青年の1人であり、特殊な資質を備えているとまでは考えにくい。したがって、彼女たちが、青年の一般的な特徴を備えていること、及び社会の大きな流れの影響を被っていることを仮定して論を進める。そこで、まず本研究の背景を明確にするために、(1) 青年期における死への理解と態度 (2) 現代社会における死の扱われ方について述べる。

仲村 (1994)<sup>1)</sup> によれば、6歳から8歳において、人が誰でもいずれは死ぬこと及びいったん死ねば戻ってこないことを理解する。そして同時期において、死に対する否定的な感情反応もピークに達してしまう<sup>2)</sup>。その後、死への態度は中学生時代には多少変動があるが高校時代にはほとんど変動がなくなってしまう<sup>3)</sup>。したがって、青年期における死の認識には、すでにある種の馴れが生じている。さらには、配偶者選択や職業選択の準備段階としての活動に重点が置かれている。こうしたことから、本研究が対象とする青年期の学生による死に対する感じ方・考え方は希薄なもの、あるいは青年期の思考の特徴から観念的なものとなりやすいことが考えられる。青年期とは、死の重大さを十分に実感しにくい時期と言って良いかも知れない<sup>4)</sup>。

次に、現代の青年に影響を与える現代社会の状況とは何であろうか。ひとつには、戦後、核家族化の進行や医療の高度化によって、身近な命の誕生や人の死について経験する機会が減少しているということである。このような「事実としての死の減少」と対照的に、ニュース・映画やドラマなどでセンセーショナルに扱われる「情報としての死」が、半ば事実以上に強い圧力を持って現代人に押し寄せ、その死への感じ方・考え方に影響を与えていると言える。また、これに関連して、親から子への死に対する態度(死観)が、伝達されていないという報告がある<sup>5)</sup>。このことから、死のタブー化<sup>6)</sup>が家庭内にまで及び、代わってメディアの伝える死が現代人の捉える死になっているという現状を見て取ることができよう。

もっとも、こうした状況に抗しようという勢力も活動してきた。その中の代表と言えるのは「死への準備教育」であろう<sup>7)</sup>。ごく簡単に言えば、死への準備教育とは、「死というものに誰にでも必然的に訪れ、そして一旦死ねば戻ることがないのだ、という厳然たる事実の積極的な受容をめざすことで、人生をより豊かなものにしようとする」ことを教育しようとするものだと言える。このような教育で用いられる死は、情報としての死ではあるが、知・情・意のバランスを取りながら、教育として行われるという意味で、テレビから流されるセンセーショナルな死とは異なる。本研究における解剖遺体見学実習も、「死への準備教育」の流れを汲んでいる。

従来、こうした教育がおそらくは成果を上げているであろうと思われるにも関わらず、少なくとも日本では実証的・客観的な検討がほとんどなされてこなかった。わずかに、看護学科における解剖遺体見学実習後の作文の内容を整理・分析した古屋敷ら (2000)<sup>8)</sup>の研究が見られる程度である。したがって、教育効果の検討方法に関しては探索的とならざるを得ないが、本研究においては、質問紙を用いて、死への捉え方が実習前後にどのように変化するのかを検討することとした。

死への捉え方についての質問紙研究としては、Spilka, Stout, Minton, & Sizemore (1977)<sup>9)</sup>が、「苦しみと孤独」「浄福な来世」「無関心」「未知」「家族との別離」「勇気」「挫折」「自然な終焉」の8つの捉え方を見だし、死観尺度(Death Perspective Scale, 合計43項目)を開発したことが挙げられる。そして、日本では金児 (1994)<sup>5)</sup>が、これの日本語版を作成し、6尺度31項目とし

て妥当性・信頼性を確認した。本研究についても、探索的研究の開始時点として、この尺度を用いて解剖遺体見学実習の前後でどの程度変化するかを検討するのが適切であろうと考えられた。また、その教育効果には広汎な個人差が想定され、その個人差を規定する要因として個々の学生の実習への取り組みの態度（感情状態）が鍵となると考えられたため、これを多面的感情状態尺度短縮版<sup>10)</sup>によって測定し、分析に供することとした。

## II. 方 法

＜研究協力者＞短期大学の養護教諭コース1年生（後期）38名。

＜教育内容＞

事前指導として、看護学を担当する筆者の一人が、死を学習することの意義を説明すると同時に実習の概要を伝えた。当日には、大学病院において、解剖学担当教員と看護学担当教員による解剖学的説明及び個々の遺体における個人差・病変等の説明を受けながら、解剖後、安置されている遺体（30体程度）を見たり触れたりした。臓器を手にとることや、遺体の顔を見ることも可能であった。また、実習後一週間以内に感想レポートを提出させた。

＜質問紙尺度＞

次の2つの質問紙を事前（2005年10月6日）、当日（実習直後、10月27日）、事後（11月24日）の3回実施した。

- ① 多面的感情状態尺度短縮版（下位尺度名；抑鬱不安，敵意，倦怠，活動的快，非活動的快，親和，集中，驚愕；各5項目で合計40項目（表1）。「全く感じていない」「あまり感じていない」「少し感じている」「はっきり感じている」の4件法。採点は「全く感じていない＝1点」～「はっきり感じている＝4点」。

表1 多面的感情状態尺度短縮版の質問項目

下位尺度名	質問項目（各5語）
抑鬱不安	気がかりな，くよくよした，自信がない，悩んでいる，不安な
敵意	うらんだ，むっとした，憎らしい，敵意ある，攻撃的な
倦怠	つまらない，だるい，疲れた，退屈な，無気力な
活動的快	元気いっぱい，気力に満ちた，陽気な，はつらつとした，活気のある
非活動的快	ゆっくりした，おっとりした，のどかな，のんきな，のんびりとした
親和	好きな，すてきな，いとおしい，愛らしい，恋しい
集中	慎重な，思慮深い，丁重な，注意深い，ていねいな
驚愕	はっとした，びっくりとした，動揺した，びっくりした，驚いた

- ② 死観尺度（下位尺度名；浄福な来世，挫折と別離，苦しみと孤独，人生の試練，未知，虚無；全31項目（表2）；「まったく反対」「かなり反対」「どちらかといえば反対」「どちらかと言えば賛成」「かなり賛成」「まったく賛成」の6件法。採点は「まったく反対＝1点」～「まったく賛成＝6点」。

表2 死観尺度の質問項目

## (浄福な来世)

人は死んでも極楽（天国）に行き、幸せに暮らすことができる  
 死んでもまたこの世に生まれて楽しい生活ができる  
 死ぬと人はもっとも満ち足りたところへ行くことができる  
 死ぬと人は清められて生まれ変わることができる  
 死ぬとまた別の世に生まれ変わって、より良い人生を送ることができる  
 死とは仏（神）との結合であり、永遠の幸福である

## (苦しみと孤独)

死とは最後の不幸なできごとである  
 死とは最後の苦しい瞬間である  
 死ぬことはとても寂しいことである  
 死とはもっともつらいものである  
 死んでしまえばひとりぼっちである

## (挫折と別離)

死んでしまえば、自分の力を十分に生かすことができなくなる  
 死ぬことは愛する人たちを見捨てることになる  
 死んでしまえば、もう希望を実現することができない  
 今死ねば、残された家族を世の中の試練にさらさねばならない  
 今死ねば、あらゆる可能性を試さないままに終わってしまう  
 死んでしまえば、もう人生の意義を追及できなくなる  
 今死ねば、家族に十分なことをしてやらずに死ぬことになる

## (人生の試練)

死とはその人を試す人生最後のテストである  
 死ぬときになって人は完成するものだ  
 死とはその人の人生観が試されるときである  
 死んではじめてその人の人生の価値がわかる  
 死は人にとって大切な決定的瞬間である

## (未知)

死とは未知のことがらである  
 死について誰もが「わからない」という  
 死とは何にもまして予測しがたいものである  
 死とは複雑な人生のなかでも、もっともわかりにくいものである

## (虚無)

誰かが死んだからといって、世界が変わるわけではない  
 死んでしまえば人は忘れ去られてしまうものである  
 社会全体からみれば人の死など取るに足りないことである  
 人生の計画をたてるにあたって死はたいして重要ではない



### Ⅲ. 結 果

#### (1) 事前と事後における死観尺度の平均値の比較

対応のある t 検定を行い、死観の変化がどの下位尺度にあるのかを検討した結果、下位尺度:「挫折と別離」に関して統計学的に有意のある差が見出された(事前の平均値=30.4, 事後の平均値=27.5;  $t(37)=4.06$ ,  $p=.0002$ )。残る 5 つの下位尺度においては、有意な違いは見出されなかった( $t(37)=-1.66 \sim 1.07$ ,  $p=.10 \sim .44$ )。

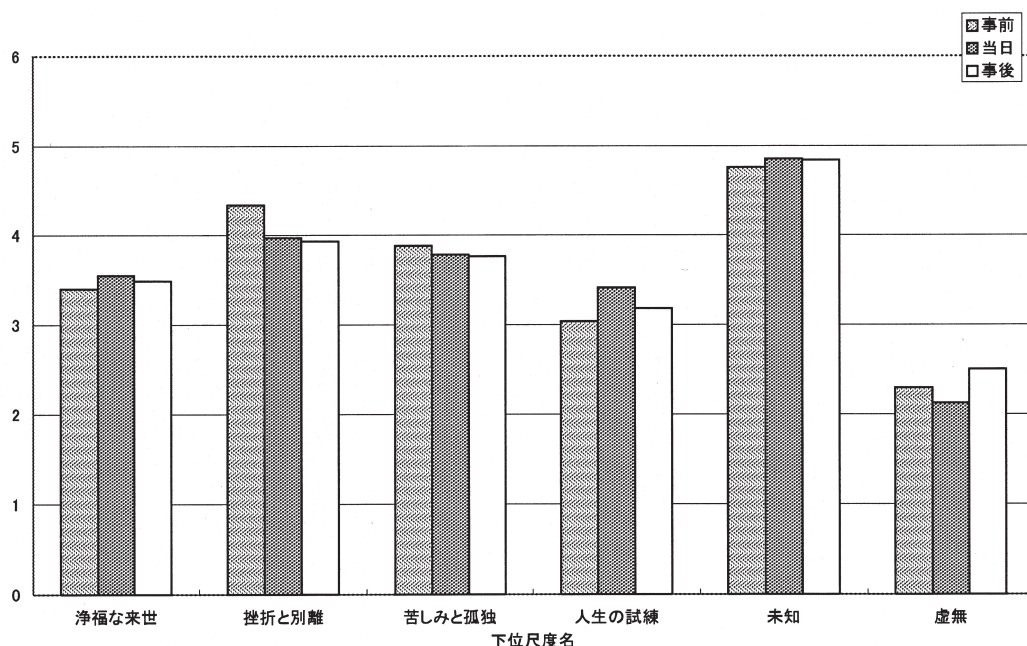


図1 死観の変化 (平均値を項目数で割った値)

#### (2) 当日の感情状態の影響の検討

多面的感情状態尺度短縮版の当日の値(被験者ごとに標準化した値)を、「実習への取り組み方」の指標とし、下位尺度毎の「死観の変化」を目的変数とし、ステップワイズ変数選択による重回帰分析を行った(投入基準  $p=.05$ )。これによって、当日の感情状態が死観の変化にどのように関わっているのかを検討した。

その結果、(a)「親和」と「浄福な来世(の変化)」( $r=.36$ ,  $p=.02$ )、(b)「集中」と「挫折と別離(の変化)」( $r=-.37$ ,  $p=.02$ )の間に有意な関係があった(表3, 図2, 図3)。すなわち、当日に親和的な感情をより抱いた学生はより死後の浄福な来世を信じるようになり、また、当日に集中していればしているほど、死を「挫折と別離」と捉えることが減少した。その他には統計学的に意味のある結果はなかった。

表3 死観尺度と多面的感情状態尺度の相関係数表

	抑鬱不安	敵意	倦怠	活動的快	非活動的快	親和	集中	驚愕
浄福な来世	-.14	-.14	-.16	.12	-.12	<b>.36*</b>	.10	-.04
虚無	-.04	.14	.28	-.03	-.19	-.01	-.15	.01
未知	.13	.03	.05	.00	-.02	.05	-.15	-.08
人生の試練	-.29	.19	.16	.14	-.17	-.09	-.05	.08
挫折と別離	.11	.22	.05	.15	-.13	-.12	<b>-.37*</b>	.13
苦しみと孤独	.28	.06	.05	-.06	-.04	-.02	-.30	.06

\* . . . p &lt; .05

### (3) 人数比

前項(2)の結果が、どのような割合で生じているのか、また、一般的な結果に反する学生がどれだけいるのか、信号検出理論に基づいて人数比を検討した。

「親和」と「浄福な来世」の関係について、どちらかが0だった学生7名を除き、31名を母数として検討すると、「hit」（親和が高く、「浄福な来世」が増加した者）：6名（19.4%）、「miss」（親和が高かったにも関わらず、「浄福な来世」が低下した者）：5名（16.1%）、「false alarm」（親和が低かったにも関わらず「浄福な来世」が増加した者）：10名（32.2%）、「correct rejection」（親和が低く、「浄福な来世」が低下した者）：10名（32.2%）となった。

一方、「集中」と「挫折と別離」の関係について、どちらかが0だった学生4名を除き、34名を母数として検討すると、「hit」（集中しており、「挫折と別離」が低下した者）：20名（58.8%）、「miss」（集中していたにも関わらず「挫折と別離」が増加した者）：4名（11.8%）、「false alarm」（集中していなかったにも関わらず「挫折と別離」が低下した者）：4名（11.8%）、「correct rejection」（集中しておらず、「挫折と別離」が増加した者）：5名（14.7%）となった。

これらの結果から、「親和」と「浄福な来世」の関係については、一定の傾向が見られず、「集中」と「挫折と別離」の関係については、大半の学生が「集中しており、『挫折と別離』が低下した者」であるという傾向を見て取ることができた。

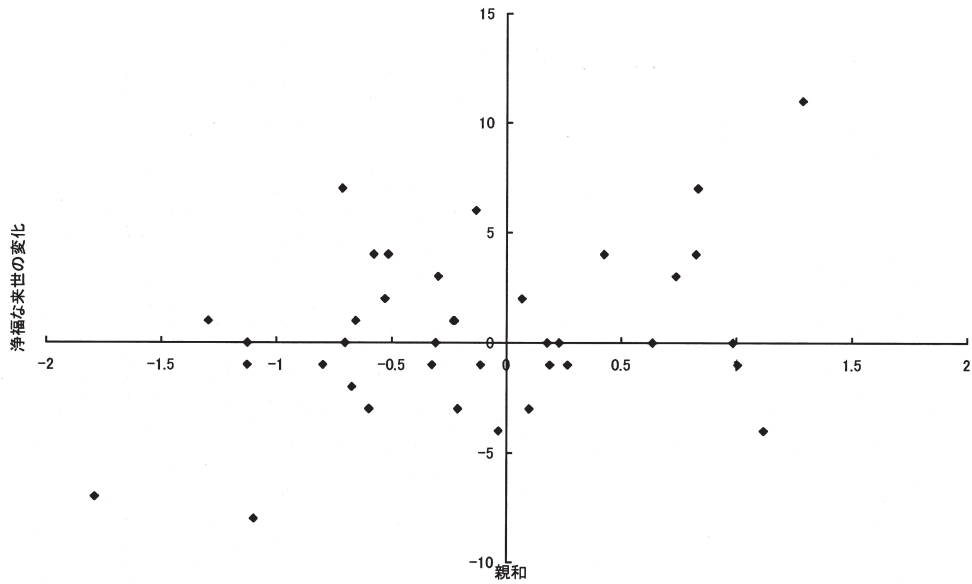


図2 “親和”と“浄福な来世”

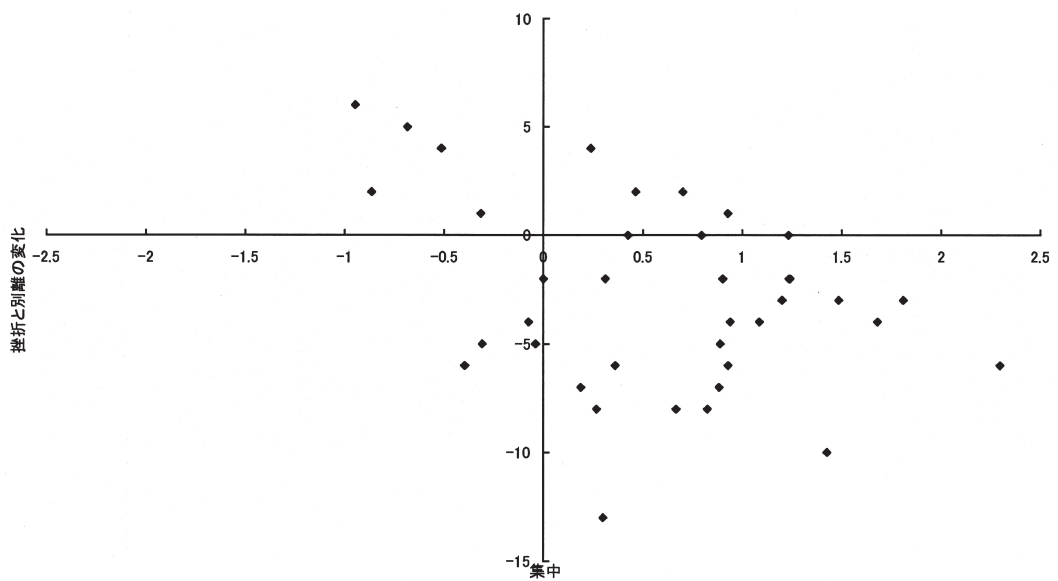


図3 “集中”と“挫折と別離”

#### Ⅳ. 考 察

本研究は、養護教諭コースの学生を対象として、その死に対する見方が解剖遺体見学実習によってどのように変化したのかを、当日の感情状態尺度と共に検討した。その結果、学生は死を挫折と別離と捉えることが減少した。そしてそのことは集中している学生ほど顕著であった。さ

らに、親和の感情を持つほど、死を浄福な来世と捉えることが増した。それでは、これらの結果はどのような意味を持つのだろうか。

まず、「挫折と別離」の低下、及び「集中」と「挫折と別離の低下」の関係について考察する。金兎（1994）<sup>5)</sup> は、死についての最も基本的な態度としての不安について、死への不安尺度<sup>11)</sup> の日本版を作成した（表4；1因子の尺度、「まったく反対」から「まったく賛成」までの4件法）。

表4 死への不安尺度の質問項目

- |   |
|---|
| 1. 死ぬのがとてもこわい<br>2. 人が死について話していてもとくに気にならない（*）<br>3. 手術を受けなければならないと考えることはこわい<br>4. 死ぬことは全然こわくない（*）<br>5. ガンになることはあまりこわくない（*）<br>6. 死についての考えに悩まされることはまったくない（*）<br>7. 苦痛の多い死に方をするのがこわい<br>8. 死後の生に関する問題がわたしを迷わせる<br>9. 死体を見ることはおそろしい |
|---|

注・・・（\*）がついているのは、逆転項目である。

金兎（1994）<sup>5)</sup> は、男女学生及びその両親を対象として、この死の不安尺度と死観尺度の下位尺度の間に多くの有意な相関を報告しており、「挫折と別離」についても有意な相関がある（ $N=692, r=.24, p<.001$ ）。したがって、「挫折と別離」の低下という結果は、死への不安の低下と捉えることができる可能性がある。また、そのことが実習に集中して取り組んだ学生ほど顕著に現れたのはごく自然なことであろう。金兎（1994）<sup>5)</sup> は、「死を知れば知るほど、死をみつめればみつめるほど、死にまつわる迷信や迷妄が払拭され、死の怖れが少なくなっていくことは十分に考えられる（p547）」としており、本研究にもあてはめることが可能であろう。なお、「死を知る」に関しては、死観尺度に「未知」という下位尺度がある。この「未知」については、本研究においては減ったとは言えず、記述統計学的にはむしろ平均値は上昇したのであるが、現実明らかに知識は増しているのであるから、これは実習に臨んで、「知らない」ということをより「知った」場合が含まれているのだろう。

次に、「親和」と「浄福な来世」の関係について考察する。この結果の意味ははるかに不鮮明である。だが、例えば実習後に提出されたレポートにおいては、遺体に対して「おばあちゃん」と語りかけながら見学を行なったという記述が見られたことから、「親和」とは遺体（故人）に対する親しみの感情を指している可能性はある。また、そのような感情と死を良いものと見る「浄福な来世」の間に関連が生じることがあり得ると考えられる。もっとも、結果においては親和が高く、「浄福な来世」が増加した者は6名という少数派であったことに留意する必要がある。逆に、「親和」と「浄福な来世」の相関に寄与しながら、親和が低く、「浄福な来世」が低下した10名については、どのようなことが考えられるであろうか。実習後に提出されたレポートにおいては、「遺体が遺体という感じがせず、嘘っぱい」という記述がしばしば見られた（14名）。これは、テレビドラマや映画で表現される遺体と異なり、解剖後安置されている遺体は時間が経ち、水分がなくなっているため薄茶色を呈し、これらの学生が想像したほどに生々しいものではなく、彼らにしてみれば、より「物」としての印象を得たためと考えられる。そこから「親和」の感情を抱

くことができず、また、死を「浄福な来世」と捉えることが減少したという可能性がある。なお、浄福な来世という捉え方は、個々の学生が触れてきている宗教や宗教教育が関わってこよう。この点については、今回の研究においては検討しなかった。

## V. おわりに

### 今後の研究に向けて

今回の研究は、特に当日の見学実習を主たる説明変数と仮定して論を進めた。そのことは、おおよそ誤りではないと思われるが、現実には、事前や事後の指導も関わってこよう。例えば、今回対象となった学生は、前期の時点で、キューブラー・ロスの「死ぬ瞬間」の読書感想文を課せられているが、その教育効果は、後期最初の時点における事前調査に現れなかったが、実習を行った日に結び付いて心的変化をもたらし、事後の調査には現れたというようなやや複雑に思われる影響過程も心理学的に考えられないではないのである。教育効果の評価はこうした意味では困難である。

また個々人の死の捉え方には個人的な死別体験も影響を及ぼすと考えられるが、その点も今回検討していない。

さらに、本研究では死観尺度を用いたため、生に対する捉え方が実際にどう変化したのかは、十分に捉えられなかった。例えば、丹下 (1999)<sup>12)</sup> は、自らの作成した死に対する態度尺度と同一性地位判定尺度<sup>13)</sup> や自己受容尺度<sup>14)</sup> を用いて、「自我発達のレベルの高い人や自己受容している人ほど、生と死、両方を重く受けとめ、かつ死を生との関わりという視点からとらえている (p329)」ことを報告している。

一方、利他性や他者への共感性が生死の捉え方に関わる可能性がある。例えば、芥川龍之介の小説「蜘蛛の糸」においては、主人公の犍<sup>註)</sup>陀多は、地獄にいる罪人であるが、生前、蜘蛛（くも）の命を助けたことにより、お釈迦様から蜘蛛の糸を垂らされ、それを昇ることによって地獄より救い出されかけた。しかし、蜘蛛の糸につかまってくる他の罪人に対して怒鳴りつけたために、糸は切れ、結局救われなかった。この寓話的物語が端的に伝えていることは、利他・共感など他者との関係性と命の大切さの本質的連関であり、先述した「死への準備教育」の意味からも、今後、他者との関係性を検討することによって、本研究の主題がより豊かなものとなる可能性がある。

## 謝 辞

本研究は平成17年度岐阜聖徳学園大学短期大学部研究助成金によって行われた。また協力してくれた学生の皆さんにも感謝申し上げる。

## 引用文献

- 1) 仲村照子 (1994)：子どもの死の概念，発達心理学研究，第5巻，61-71.
- 2) 上藺恒太郎 (1993)：子どもの死の意識における感情表出年齢と道德教育，長崎大学教育学部教育科学研究報告，45，1-25.

- 3) 丹下智香子 (2004): 青年前期・中期における死に対する態度の変化, 発達心理学研究, 15 (1), 65-76.
- 4) 山本俊一 (1996): 死生学, 医学書院, 東京.
- 5) 金児暁嗣 (1994): 大学生とその両親の死の不安と死観, 大阪市立大学文学部紀要, 46, 1-28.
- 6) 澤井敦 (2000): 現代日本の死生観と社会構造 (上), 人間関係学研究 (大妻女子大学人間関係学部紀要), 1, 13-29.
- 7) デーケン・アルフォンス (1986): 死への準備教育の意義ー生涯教育として捉えるー, デーケン, メヂカルフレンド社編集部 (編) 死への準備教育, 第1巻 死を教える, メヂカルフレンド社, 東京.
- 8) 古屋敷明美, 田村典子, 石野レイ子, 土谷美恵, 塩川華子, 大谷五十鈴, 沖田一彦, 宮口英樹, 堂本時夫 (2000): 看護学科における解剖遺体見学実習の意義ー実習後の感想文の分析からー, 広島県立保健福祉短期大学紀要. 5 (1). 25-33.
- 9) Spilka, B., Stout, L., Minton, B., & Sizemore, D. (1977): Death and personal faith: A psychometric investigation. *Journal for Scientific Study of Religion*, 16, 169-178.
- 10) 寺崎正治, 岸本陽一, 古賀愛人 (1992): 多面的感情状態尺度の作成, 心理学研究, 62 (6), 350-356.
- 11) Templer, D.I., (1970): The construction and validation of death anxiety scale. *Journal of General Psychology*, 82, 165-177.
- 12) 丹下智香子 (1999): 青年期における死に対する態度尺度の構成および妥当性・信頼性の検討, 心理学研究, 70 (4), 327-332.
- 13) 加藤厚 (1983): 大学生における同一性の諸相とその構造, 教育心理学研究, 31, 292-302.
- 14) 板津裕己 (1994): 自己受容性と対人態度との関わりについて, 教育心理学研究, 42, 86-94.

## 参考文献

- 保健体育審議会答申 (1997): 「養護教諭の役割」.  
 芥川龍之介: 「蜘蛛の糸」, 講談社, 東京. (1987)  
 キューブラー・ロス: 「死ぬ瞬間」, 読売新聞社, 東京. (1971)

註) JIS 第3水準 1-87-71